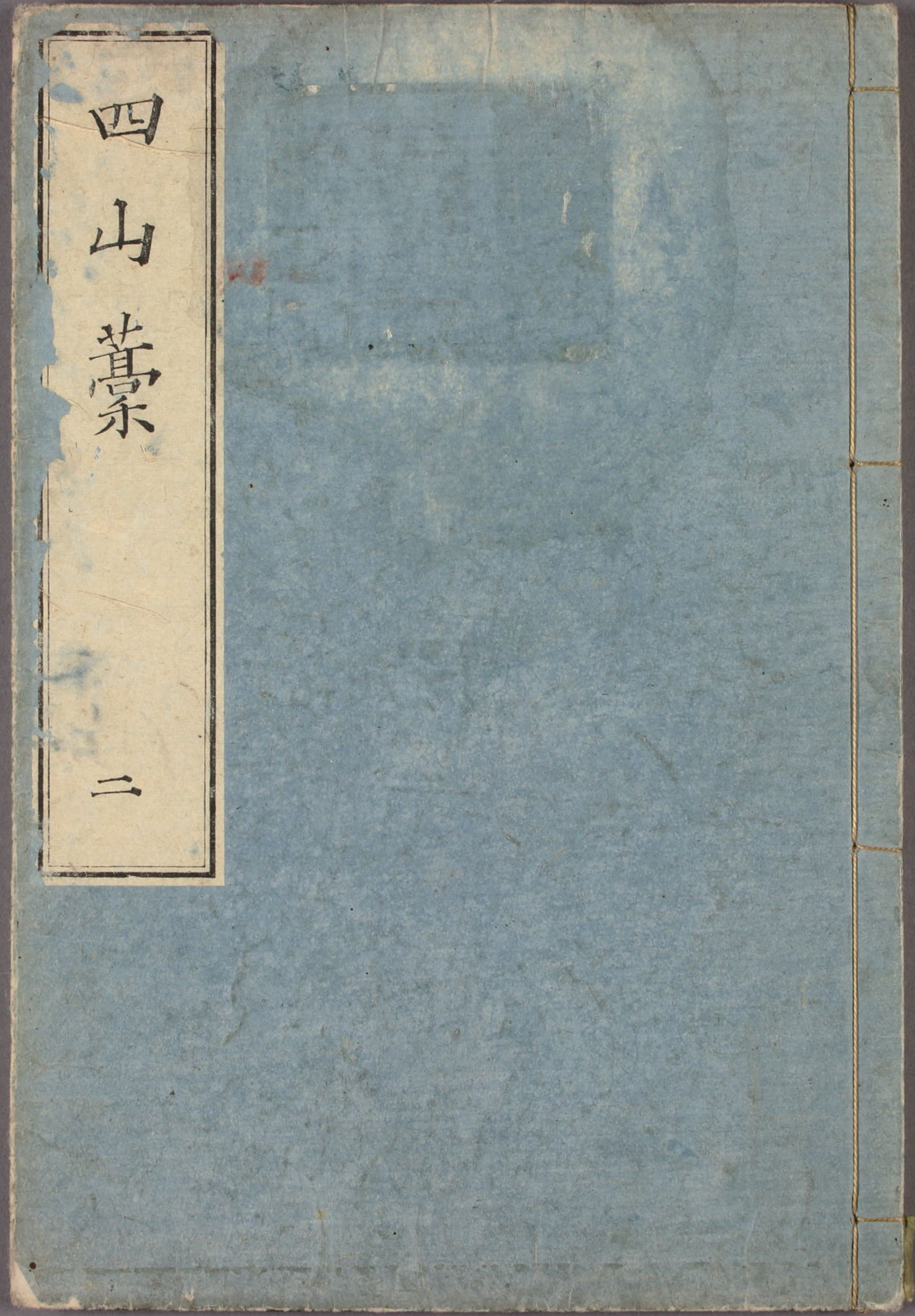




四山藁

二



四山藁第二



隨齋夏成美著

俳諧小言 十則

俳諧をみよふはきくもこれに侍りて思ひを述る戯を  
 ぞれの中の中昔まては多程言り乃といふあれ歌を  
 らう紀昔もせ銭翁よりけりめて詩歌の情をうけし風雅の  
 心を俗俤りうりふにありよ多とたをも詩経万葉本乃

豊蔦久臧

采津包徳

齋藤包昌

夏目包壽

同

校



古体は似たりしはれそ此蕉翁の門弟子おのろく  
ゆるりありて道のちまにわづれ系乃い落くにみされ  
たむやういひもてゆけを楚のまゝくよなりてハ其際乃  
ゆるり一ひをのほあひいせおのくしゆくに蕉翁乃  
一体といふゆるり実には蕉翁をそせりまれといふへくは  
是をたしと眼くき人の象といふ獸の尾をまて足をけりて  
漆桶は似たり幕乃やうあるといはむとくその象にあはれ  
といふへくねくは眼乃人のほあとの象をいふより大に  
あふへく一扱蕉翁の風雅をいふたをせりよにかの詩経万葉  
なほのそくねき草木魚鳥におほをれおほひをせりやうに

風雅の心物よけりておのけりなり出せるはくは人乃耳を  
驚くか百年乃今もめて奥まるといひくは邪なき風雅の  
心乃根本にまひあはれりやあまといひ出せるあはれをいひ  
くよめはくはくあくはくはく自然乃姿をまはりけり  
その詞やゆりに趣ありたへく新奇乃あはれを豪邁の詞を  
けけぬもそのもは趣向けくあく俗意よりけりみ出せる  
外をくまらて内に実貯くおろりて見ゆは此在ありたへハ  
俗語鄙言ありもその中風雅の心をうたひ出せる人の心にも  
徹底して鬼神をけりむへも此をまらけれそ古体と  
いひ近侍といへるもいさく詞のまらひりて風雅の趣を

片々にわたりめありて千た蕉翁一世乃化意を繼せ  
しておのまじく醜を画けりてたのけり向上の一路も  
企至る處に蕉翁むいへる事なり古人乃求むる處を  
そめて古人乃求むる所をもめを南山大師乃業道を  
けりて詞をもて門人ふふされり社心をよくおもへ  
けりて末師を捨ててまらに蕉翁の心を削り形を破て求む  
所を求むるそのまじくおんを涼めて古き句をもんふけり  
経歴を向ふまに心をまじひりて神ありて是を通り  
處れまじり

句をけりて至りてまじりて雅を求へりすけりて俗を求

あり俗ある心ありて去捨けりて雅におのけりてめ  
りて雅の趣めけりて詞を求るゆゑにその求る所に  
つきても俗意の出るるを句にまじりていふれけり志を  
たけりてかく乃おまじりておのけりておのけりて意の俗を  
あつてまじりて句を棄るるおのけりてまじりていふれ  
けりてわをけりてまじりてみりていふれけりて他乃句  
再ふてまじりて

句を名に心けりてその句乃心雅ありて俗けりて心  
せめて詞乃工拙ハ中二等ありて多しを詞をめて多しを  
俗意ありて取へりて其の心に雅趣ありてはけりて詞專き







第一八句乃好惡一してけり合も第二の論あるべし古人變化のまゝめにかまうけうる法則あるをそ書彼書の空論をもて實地の附句を繫傳一かへりて變化乃趣を展する學者ある心をぬて變化乃事をもまへわすれ侍るは一坐の争論に居みぬへい本より諸書乃そめい詞の數くいろいろ強記乃人形もやも一記臆せむるもかまへり詞に無盡の拘られも諸書の法則もその大綱をおけりておとすはもとそみるに古法を展く居きりしけり

會席乃ありさほいふにも風流ありいふに花紅葉の造ひはくえあしりふあり西行法師の扇文臺ふりてをう同調の

友三五人花晨月夕におとひをのへていふありひよはきて情をゆけいとめてさきむねの懐紙の法堅懐紙横くさるし乃さきさるる法あれと今世の緘る物にさかへり句讀の志やう人りめてさきむね聲乃言低りあやさるるをう一かへり東坡居士う三分ハ詩七分ハ是讀るといひよ思ひわらふおほし

世人の褒貶けりにもあひ應う下里巴人の私する者おげく曲きりれそおすものいさくすくおきりあはく今世の人乃きをよろあひてわの心にあもぬ詞をばけ侍りあはれ世に應りらよ嗚呼の考とよる知音の人ひよあはるあて





風情乃ちありとをばくせりあはれ世乃いはりありとも  
かき天もその地ふひろひて屋をて人跡多うくせ形も  
事ありく形わき形もへし色をうと色をさむ人を豊  
き心の心をばくそわひの中乃玉をゆうとさぬの火に  
いりても屋もつせぬけのひり至る形ものさや此集の  
そ名に一語をそへしとま支國まできよえあひま乃  
栗のもやれはるる心をもて勝鹿乃野人贅亭成  
美書

句帳小序 應汀島需

みくしあまはまはくはふらふとよめを無心所着乃体をも

此体ふくともはりて万葉集にもあひの牛とよめ季  
今の俳借はくそのあひしと心願一物形交處より形  
かききたるそふりもよく萬象とあはれをあらる事奇なり  
といふへし昔海のく人乃鷗をさもとすもの所はかまき  
浮沈りまうひてひのまをそひてあはれ事なりある時此  
かまめをさくへむとおもひてゆきなりけのさひとけもち  
うらみしてまをむきうせむといへるもけお感まらうと  
わらわらうといふ屋うけけを無所住乃あろをもて  
おるじくひきあはれにその心を生せた草木鳥獸ひくけ  
くに感格して色をもねをとりんらあはくはりまはく乃





三日月に照して過せし年月乃ち懺悔せむと此をけしめ  
書て文音乃法好士なりとわらふ

句帖序

舟をもちて水に浮し由ふをかりてあれる人何日乃ちまはる琴の  
緒あらしむおとまりて其れのをそとひひたふ人もありき人の  
えらぬ事をちくあれふの物をあつたのふうたなりとて  
なり今の俳諧もこれよあそらふく無一物乃ち心頭より  
うらたある他意をち居くある人なりてよりとてあつた  
ぬふかき玉くおほくの他者のそとけくの句乃ち中よりと  
えとれふをひひけりかきむらぬ事をすける心のあつた

よりて人乃ちえらぬさひともなりまらぬ水乃ちら  
とひをわき法のおとまりてあれふもあつたやみちのくち因  
此をけしめたあつたはつたかの野人夏成美なり  
あまけりひとくあれふなりすあつたはつたよりてつひひ

題乙因旅日記首

舟におほけのせにあえまや中よりつた乃ちけりはつたの  
すみして書つたあつたれひひちね旅ねのあつたけふあみ  
うへつたすれ心なりへつたえむちちちちちひひ  
あつたわらんちすちちちちちちちちちちちちちちち  
のひひけあつたをちちちちちちちちちちちちちちち

くうて三百余程のさしきくもさすにうねとみぬさうは  
らふ方あけく賡句といふさありて申きて世に戸に三旬あ  
らふ乃日数を治して今尚と故園に悔むとすみらのゆく  
てにひひるす巻く韻よみらぬもさねも野分のすくね  
みささうもくく何の所を去るにささみて書はね  
つさのひけくさくすぬくを悔む人何りてはくむあて  
こひねふうねすふ心のあまるにすこゆふれ羅城門よ  
すみくといふ鬼あまの氷消さうとあはれさや葉をとへむ  
ものさすお時あかうと心くはあ物のけさにおふさ  
けくさくさくさくさく友人夏成美多田の森蔭のゆふ月

夜下草を採

金翠句帳序

忘年の友硯亭はねにまうて閑を多きくうてい風情を  
もやむくに胸中さくくといふ一幸のたぐいへあうねく句を  
はらねうたうをさくといふさくさくは俳諧は無念怒を  
さくさく後中万巻の書りともいふいふさくはけのらう  
らけのけのけのけの一家乃工夫あうてや念くとい有を  
さく一有わうまてさ象とけの見おさおたりいささうその  
物さうらに心乃師とけりてさく象にお情をうつまたさく  
一紙小画くうさくくわうらに一草をおくさくめてせのさく

をさくくにその水墨乃何れと丹青の色を好とす  
一大観とあるやもそのけめをあたへてあに一張の白紙  
形そのまじり物と心中せしむる形をあたす其の形をあたす  
つらつ規にすしつておのけり廣莫乃けりひふあをよ  
原けりけりもや祝経師の馬車の家多きひふなりけり  
ふまを序せり

書句帳首

いづまき先つきの後終るんまけちあすしてけり  
起かて例のまきけりつにあらぬ人のまけちひはけり  
けりまけり人まきけりまきけりまきけりまきけり

さし處にありぬれを此やりの中けりけり後終るまけり  
原けりけり梅乃春ふけりけりて咲かせるも八朔梅けり  
まきけりまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり  
らもおきけりまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり  
まきけりまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり  
上子のまきけり画けりまきけりまきけりまきけりまきけり  
まきけりまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり  
流りまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり

浅草及胡小引

まきけりまきけりまきけりまきけりまきけりまきけり

ありては語を向りつをさふ古人いへるあり文臺をたゆせハ  
ふ系けうこ也やけふも先達乃いひすて書すたならやあ  
たをあひいうらすれうへて人りも足あまるといひけうつ  
くややうれやう白片の楮先生

贈短冊掛辞 以住吉松樹製

姫松乃多んうく多人乃もやとをさうく城日あろとて  
つをいり系うた向もいひ出ねいけくものなうになを  
くを吹石主人は海わくする海や川の紫乃あやうなにあのひ  
めくくく合抱のゆくおほまめ系他まもんまけくきまめ  
賀不老庵落成辞

不老庵地をくふさうくくさひとやすくての人ハすはさ  
所のはけまうたあひい形にまおあより下つきてま  
けくまうくをわくさうすまをうけうあれそお胸中  
物にほくさうさうもあまじへあのみひや冬乃  
日うあうた方をあつて買日乃たのみ小春をまじく  
市より乃りうさぬはひけくくはまにひより此庵乃  
のうたれたすくくの心標あうまうさうなうけう  
言季作の門はあつてま松乃う跡

示若輩辞

年乃けらにもあぬものやもらうて月あみ乃排階



すくに忘年乃友とりよもあうりにや日野屋中の蓮亂はう  
く園中も白の子をやもこせしもあうりよひて中く  
けしきもあうり母をわさるるさうい蕉翁忌しそ何乃あうり  
法といふれまむのまおこりやしも物さめのはうせめれたる  
う解してさうしを法を庖丁うけしとあうりしうさ輪  
扁う池けした車吾子等にはうとむるとはありうにり  
けてうくそとむけりりふ

新乃しき風雅の心もてはめと

賀巢兆書画會辞

万花枝を辞し狂風おもてにありけりた以書画のけをひも

おどしやて舊友巢兆同好をあめ庭をさうくすみ川の  
落花を水辞にたうくとくみ入樹の木乃めを莞然下  
にほをさう此日天けと風おとるに春のこらめもあうりに  
をさうはうりま集る門人等東脩のけみ物をもてりふ乃  
費にらさむし此の世の中めたるをさうひろうにうさき  
りふもけりすいとうさう凡四民はけりねと余乃松氏  
伎藝をもては服乃はうさうあを人さねおあし世のつ  
人りしうり世を會る心もてはうさうらおぬし打あうり  
ららめりる乃さうけり世をさうさう女乃仇さうりあもけ  
人のいひあひらむしすかにはうり風情をもてはあていな



筆をけりお守りくむしー乃あしきもを今乃世にあつて  
めのはへよあまの徳をうたひしるくもわくは古今文  
物のかきある治乱こそよく乃いさげひを人くわくまうて  
え歌あましくわく字録すましく此國のねもあつての功  
臣勇士そのおもくあつてもはうひまてもあつて今あつてとき  
おしんやうにいひあるに麒麟閣とつしあまにうまはくま  
る画やうもひろくにおひるくちうくあつてもあつて人の  
いひはくふ孝子義士乃傳り今乃世目ふちつたよ  
うあまにわくくつてその實をまつのあまを  
あつてあま中にうまはくもくつて

清代のわけめ秋霜三尺乃ひるる月日やうにてつせれ  
はあまのくくけれさをおひはれ乃本すあつてあつてへ  
くくをけりお守りくむしー乃あしきもを今乃世にあつて  
めのはへよあまの徳をうたひしるくもわくは古今文  
物のかきある治乱こそよく乃いさげひを人くわくまうて  
え歌あましくわく字録すましく此國のねもあつての功  
臣勇士そのおもくあつてもはうひまてもあつて今あつてとき  
おしんやうにいひあるに麒麟閣とつしあまにうまはくま  
る画やうもひろくにおひるくちうくあつてもあつて人の  
いひはくふ孝子義士乃傳り今乃世目ふちつたよ  
うあまにわくくつてその實をまつのあまを  
あつてあま中にうまはくもくつて



何れもなふをれこひいこぬ。時へさこなくうましくや  
ありて多しにその古意をきき其のありてをみる。心魂を  
すふ。古意を物に書付て。稽古乃まうにせむし。ありふに世ふ  
ある。天狗形をくくもけ。か乃壇光うすう。これけりていさ  
一番あり。いひりやせん。心とけう。呂ー

梅園記

梅をおほくう急て梅園といふけ。松をうけりて。松亭と  
号け。柏うり。雪て。柏菴かといふ。於にふやうせう。うまひ  
すも。り。以。傍。り。寺。り。安。樂。寺。や。い。彼。は。き。れ。み。て  
ら。乃。名。を。其。の。梅。に。よ。る。屋。於。か。う。記。由。多。し。ある。け。多。し。

その南に菅神乃み屋。後ら。急て。いつき。梅つ。家。事。り。乃  
やう。う。り。あ。う。す。あ。う。う。と。や。う。り。此。宮。居。り。文。雅。の。眞  
意。を。い。の。り。渴。仰。乃。あ。ま。り。に。河。愛。樹。の。一。り。中。枝。極。そ。め  
て。より。根。を。い。あ。ま。枝。け。う。へ。年。く。に。芽。を。わ。ら。わ。る。本。を  
う。急。そ。へ。あ。う。け。く。大。く。花。の。品。類。を。法。く。せ。り。直。脚。ハ  
野。梅。枝。す。く。け。く。座。論。ハ。花。お。ほ。く。て。あ。ら。多。し。緑。葉。ハ。白。い  
ふ。ま。や。う。に。豊。後。と。い。ふ。の。ハ。其。の。實。を。ま。と。ま。を。せ。り。八。朔。り  
う。あ。う。け。く。ハ。寒。紅。梅。乃。あ。ま。い。あ。う。て。鵝。梅。と。い。ふ。ハ。花。お。ほ  
ま。に。消。梅。ハ。け。く。屋。に。け。く。を。い。ふ。あ。ら。龍。乃。あ。う。て。即。ち  
この。雲。結。と。い。ひ。う。ま。れ。も。の。其。の。外。ひ。と。ふ。屋。へ。り。

をさちうあやうす色におのくくちをゆくのへ媚をほす  
かくてと江南乃天氣度嶺の色に少海ひみちて居て園の名  
やあけりるを体たうくくその中に小亭をうくく賓主四五人  
猿をすほめて狹くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ひすすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
芋栗のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
せまうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
はくく氷肌玉骨けくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
酔けり

多り酔てそれよむくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
人々酒り隠きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
今十よ年乃むくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
多つくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
を根ありにして為仲乃何くくくくくくくくくくくくくくく  
さめけくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
入道々此亭に何くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
上人の善通寺乃松よ影せくくくくくくくくくくくくくくく  
乃心様をうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
志のい北の磐石山りくくくくくくくくくくくくくくくくく

是わらうらむうひうらるる所ふハ何くははりつたやうひはるふ  
ありてわら景菴にじう一様世教はつて此室乃何く清一筆  
坐りて酔の中に園一はりぬ是を壁にまるとたきて四此  
人のせちにふひ一一く雪乃舟あたも出へくお解西家耐るうの  
園はじうひて落く冥くゆ光の中にその何をひとせまにせ堂  
りをおりふわき夢寐に園中乃おもむきををわすまに  
ある一一わら贅亭をおりふやひあやましく乃便りおあやを  
書ておくふまはり千里に一枝のまゝをよせし心まへ也  
是を記す

題龍几句帖

尾をえて雀りぬ多うてお見れおあをさる一一てうら  
あつたまにここのをもてすまはう何くははりつたやうひはるふ  
こく祿をおりくすれ心と何やまの何字を能潜乃句法く  
おもお解居う何くもある居き世人の褒貶乃とおりう一一てひ  
おれを神情中ひはあを何くははりつたやうひはるふ  
りまの何一一くおも念怒と一氣のうと記かておのつう  
天地乃運動よまうひ萬象のすうにひひうああるこそ  
めて一一く多様はまの諸方の好士うら金音玉聲を  
を一一す一一て此帖一一句一章をよるか一一ぬ一一んり  
うお雀りぬ多うてお尾のあう一一くおもへ記をあひね

ふもれ也

素卿自句合序

かきけり乃けのうにぬる所のふをあしきひいハ名  
利をひりひ家あふけりて一ふたにひちのけりてひあり  
同類乃句を蠻觸りかきわふ多あまにうちまをあ  
わまをふそけ他者いひとをけりてのちもとけりて  
ちけもくまに甲乙やもに一時乃わくひとけりて也と  
ふりふにやうく西行上人のみもすを河うけ成郷のふ  
てけりてらまをけりてのちわすめあ勝鹿り在り  
素堂老人それなりひて自句合序を判のこくもあ

みりて書ぬまを先縦ておひひとあまやけりハ  
判者もみりてけりぬるをまけりてをあらえてわま  
ゆりてけりハ素老人すみりてけりて名をあらう  
まけりて一ちけりて興て心のおふまをあらす  
けりて素卿の句をけりてまきく名利乃間をはあまて  
けりてのけりてあけり是非り心けりてあま古代に  
て意匠世ふあまはけりてけりてあけり心り是非  
せむりけりてまけりてあけりてのち乃人判乃まを  
あてけりていま迷中の是非ハ是非俱に非也や

題空則是諧後



名はうー乃西にいー夢さ家まよかの夢まよまわい  
 ーれもわ中に書とほしてひらうと雨とよそのまをうんう  
 かさやうやくぬ管乃小管に鬢はあさうなうくふの草  
 中もえとぬゆとよりちさうの端まてまやうにぬれて  
 踵のゆやにけしゆうまをなうて草履乃尻をまて足半と  
 しまれまゆて鳥のふさめく中うにひびあけとまは脛乃  
 所さまて涙うにあらぬ世に能澄ーとあまよゆゆ 齒  
 来まそうなうぬ帟乃地獄ーかつとやうめまそまうー以  
 あまにけうひ捨さ紙筆の罪ぼろかりにとて六あま  
 めさるとしよ物まうてすうにうはぬま嵐のわい姿ま

繞詞花集  
 人びりてて仏  
 供養ーううひ  
 不雨のううて  
 袂ふかううれい  
 礼盤ううわ  
 膳西上人  
 いーをたひ  
 了さうんも  
 足るさうやハ  
 法のうたえ  
 あり

かまを後乃世もはそとわさう膳西上人乃説法ー  
 けり所にあるうて衣の神ううさうまハもるやハ法乃うん  
 ありりうとるの板乃すれアをまわひ給ひーに是ら  
 けう系ぬのありぬれとゆくもうらうしてるぬ  
 家にうあ破さううもあ一本とねじやうして求め  
 ある赤と紙の古骨の荷葉の雲にひらうなるうらわ  
 城は人う肩脊にうらうさあまう中乃ひさうういやう  
 此古傘のほひらうわ系浄佛の輪後光としまれおひ  
 さまらうらまハ此中に攝取せられて四十八本の骨くも  
 弥陀の本誓まはぬのみあり我ホ小根小樹のあう凡夫乃

一味の法函小うふほひて踏すへりて相子下へ一遍の  
称名紙やうもせむ此功德豈ひあ〜人やし果ハ  
よみよけりて戻まはれ〜をや〜乃あ〜た麦宇物語  
せうはりに随喜の筆をあつ取て此画傳へはえ侍る

麦宇句帖序

観音めく〜乃詠歌帖道者頌礼の念佛簿あ〜  
あ〜いよ吾も〜乃句草紙といふあ〜あ〜あ〜  
人〜に狂句い〜つ書〜て〜を〜のすれ人を  
あつめり使とあ守けま〜三日の糧を〜〜  
独行すふハ風雅にあふ〜話計也吾友麦宇〜

あ〜〜してみちのくは果のけて〜あ〜ん中〜のわら  
まにのをみてあ〜む〜り〜夜乃雨窓をあて山館一枕を〜  
あ〜〜曉のあ〜り〜野亭に杖ひくあ〜た〜  
あ〜〜あ〜や〜〜子〜あ〜丹青乃業も在囊せ〜  
〜て粉筆城あつ〜事あ〜筆のた〜も〜  
宇〜は〜と〜と〜胸中一味乃俳諧は〜  
〜くも〜屋〜て心の友と〜りて〜を〜あ〜の〜人〜  
は〜〜と〜ハ五歩に友あり十歩に朋河李堂は〜を〜  
〜と〜せんや〜山水泉石の月の旅〜  
雲烟の眼よ〜も〜み〜吾画申乃趣〜あ〜ハ〜

古人の迹を明しけりしにけし此人の心多うきと此の紫  
ひまのしもおしりて居るしやうし張琛の外造化を  
解中し中心源をゆきしつひしりあり存城ありせし家物  
すれまふまは城この字成乃序をもあふんまふししと湯に  
書てあくらもれも多田素老樵夏成美

日牌帖序

安期羨門我々此名をきく吾人今つひくこふあふ大椿  
靈亀わを其事しつを志しははれしをいまも見れ  
二胤齧牙すくやく白駒蹄踰猶か海し誰乃人うはひし  
此娑婆り住りつ居れはと菊阿佛う上手も死ねる

歎せし多うも哥詞鄙也といふもそ心あふなり耶あふに兼應頃  
うも以来の名師の終焉を諸集に探りしを歳時をけしひし  
うも輯録しつ一帖の日曆とすす是を子にあまて一を  
ひも翻讀せん人々すしつ々々綺語乃因をりしとしてを居る  
佛乗し帰せん事成ありしへしねうもくハ此風雅をもて  
あふねく一切りほしあし吾ホと居生し共よ上り此  
地位小至しんを帰命誓首敬白

藻實草序

李義山、雜纂ありてし清氏、枕しつし法補り物  
く袋其角、雜談集みれし其趣なりあはれり物しき



尊家ハ侍々となせりともやそれのたふひ物ねとむの  
好士の満々たる可る能句ひも侍書しあむ共たの  
侍々あやし記され清文もの可るうけき物あり  
可るれる物ありたのく種賜乃をましくさて あつひ  
はくハ面をあすふん地やせじけハ風土の物と學も  
此一帖りをまめ入て常にくくして帳中の秘とせじし  
是一步をすめ清しく名所を志ふやいへれふれ語を  
のちくし 彼鬼貫の禁足紀行乃たふひあもよそへ侍  
しとそれの清片乃よれをたふしよれあひたれ記ふ  
はめて多田老樵復成美誌之あかりこおるもはり

めくしりハ何れ

月川上人追善集序 應塘里需

法を觀す事正しく心に着すもハ邪におもひて  
止觀乃文を心しく世よりくまふ法師ありりすて  
佛像經卷よけりめて湛汰瓶ひやも身小く教中の  
物くて今の世よありてはあとの世捨人なりりあはに西  
行乃抖擻をさすひ芭蕉の漂泊をくをみはく西より東に  
杖をたふしり予々住家葛飾しよ芥子縦横九尺の庇を  
あれてあつしくすめ事もりき讀經礼佛のほろハ狂  
句をさのみて毫をむて身のりれ所よせんふりり

其由とよ別号を人のきくはいつるまにらまるとやひよる事の  
うふけりして居て其由乃名紙捨て月川とよまれりま  
権室をもち家ののむ持まといれらるる乃庵乃名紙と  
すてに世を捨て名紙すて風雲にまよふ心の中いは  
るる涼しきまらむるまらくもかゝるまらとまら  
居まらみまひいおほむ神乃うまの宮とのあまひ  
多賀大社なりはうへてまら社造営の事あり執おこま  
これらる見もかまらま心乃真意にまらふなる居りれ  
みつるもやまらひきくかまらくてはひに寛政庚申  
四月廿日大なりかまら休まらけりいれまらとみとんまら

物れらまらとてまらゆい推し狂句若干をりかたり求て  
何方にわくらまらせんといふ困人塘里等々ありまら乃心  
乃まらわまらまら上人乃久し知知音とてまらまらまら  
ゆら居り因縁まらねいふて書まらまらまら懐舊の  
まらまら紙拂てまらまらす此集やまらまらと上人のまら  
まらあまらまら

題 祇徳法師句雙紙

ゆふ居の山にまらけりまら杜宇乃啼まらまら有明月  
馬嘶て雲雀のまらまらあまら野の原まらけり花舟のまら  
まらの下まらまらてまらまらまらまら益の居まらまらの松の繁蔭まら

薰風を懐きて志をねじりて夜の屋中をのぞくは  
此も多岐の轉變旅をたをれりをうらまはせ俳諧の  
連句ありふも折句にかゝるをゆく事あり此もくせあり  
やきすすへて世中にたちめら稽ふ人のすきみも帆あける  
船の底に多す此も折句あり日々の旅をゆくは  
まゝ何そやけまハ翁もいふ事あり世を旅り代々小田  
乃とまはれいそく東海道の一すちもあはぬ人の風雅に  
おほつるなりや

吟社懐舊録跋

人乃心のたよりけりありて乃あはれやわまにいとけ

人いふ事多しやうもさあえ多しけまこれのつらまねも  
心おきき友の折てやは人のあかひりあらすてさる  
形家へりわり蓬窓りあつて月多れよひの淋しき折  
くむりよと名多家人く乃折くあつて年月は  
諸書よりくはる人ふしけるあつては志をわすれり  
帝のそりに去付る物ありけり蒲生の中塾生は物  
くはれに彼人乃伯父吾扇老人つた乃あつてあつ  
めて仮ふ懐旧録と名付るて平等回向の念佛朝申よ  
はとめらるる老人たつて後世の志乃むなしく  
形も人も念多しを板りて同好の俳士より

あゝ庵ん中をわきに校正せしふ老人のいけふ世  
たふいよあゝにあゝ撰すなうゝとれ志のいけふもあ  
を次まきりいゝゝ記老婆心あり紙とをれあゝを  
あゝいよ換益しとて起しけうもは是をらん人たふ  
あゝ紙あゝゝもねろ紙おきあゝいあゝんハ中塾生う  
福ふい也といあゝをまゝとあまにひゝゝ記人くゝ  
告あゝりす事にあゝ

書句合後

たうすひの書語はけ乃草草中水替くいやま  
ゆまに書句合の判せしふ人所はけうゝあゝをひふ

せうゝハ心を入侍まゝとれハけうけう記あて今ハ淋乃  
柄も朽ぬゝれ年月ゝねろちわすまゝるゝ形まゝとさすゝに  
いあゝゝあつゝゝゝ海筆中うてゝゝあゝ紙書けく  
東郭乃瓜喜泥の芹所ゝはけう味ひあゝぬゝゝを齒をほ  
ろにけすあゝゝる老圃の身ハ甘まをも淡しゝとね海申  
あゝいねほゝる庵ゝゝあゝ茄子の肥まゝれもけう筆のかほ  
それもゝあゝれゝゝの姿ゝゝと強ハ是非ゝわゝるゝかゝ  
中を

書句合判辞後

世ハ木を海ゝき鬼をゝを画るもれハあゝゝハ似けゝあゝ



けもあねくおほ申た犬馬れよの目よりうらたはう屋りて  
其れ物よきくしてはいまもやとたかぶれもあれ常に居る  
もれ字すたかたは人々の目より心もよくおほえ  
あるりぬまといさこれあひめもあふ多しなま俳諧  
の短句はうもほかかしく世にいひまきふる俗談をもて  
けり申すはすありのちめも耳たらぬ一は世句合といふ  
これ小判のあつ聚るくといふのまじ人あはれま多田凡  
森りあにねうせをのし聞あまそ琴をあまもまうわ  
ますいまじや峨々洋々乃音りおいてははいあへた屋り  
もれ一はまとい目よりうらた俗談あまもまうらやうせといふ

あをまわり侍りて心乃あうたわあぬ處あり  
屋りたて犬馬のうらた此屋すれ消あまはたてふ乃まかこ  
に人ありて曰他人屋上のあまもかくにも自己身上の  
風種はいふとわまもまていふ屋りわらまひく乃う  
うといあ他人の手をまのり乃まはまこ

畝はまり序

山田より水を流すまらうわい海にも桂竹くあはみ  
く畝つらまとい名のあ人あり畝乃柄も汚ぬいきまうた  
目ふありあつ田子乃裾をぬりて是をいふまあれ  
風入騒客乃心のあまらたてあま染りあまふくをまむ

あつしはまを秋乃田のみもたのりく花實やみね  
おもひおめたり今の世乃流りハ稲葉の風乃うたしくして  
いふも姿のむつしきをうたふおひふ和哥ハ文覺らうて  
詠ふやと申をさくあき也ふくひちちをさく見ゆれ  
世よりよくもあたるなると慈鎮和上のみあちか  
あのはくくわく又曰わくの文字小く中として此国の  
人ハ哥乃みらをはねふおひあへくはあきぢの園くの  
風俗也と此撰者もおのつく困く乃流行をえとて其  
境界をたたくむとしふ心あふへく撰者ハ三鴨乃麓ふふ  
雲蓋戯りあ乃数言を題すふもけハ多田乃老圃夏

成美也

書水音集後

じく佐國といひ人乃ちけの花うおひひるなるけ  
あつしみて園乃草葉にあまはくそく起てあつの蝶を  
あそけけめさく如枚長、蛙を巻するはくそのあひ  
あつて秋乃さやり起声をおとめてより冬あひるの土ぬを  
こめはくあひひたて山田に水をさすすふあはくあれ  
あれるあくねをほつもいさつに師とたのそをる人乃  
巻すんはくをほつむとけを蔭すあひ人をおも  
ひて井棠の木もれきりぢくく枚長ぢの人なるあ

櫻句帖序

佛よははるる乃をれをたてまつりて後乃世を夢てきこえ  
おれ路よハ西上人乃花よりまをこころ心物と出羽の國  
大館淨應寺とりよにひく木乃橋ありそく誰此みほと  
事にくふ種をたてはつりおれげん今ハひろき國乃中に  
あふひやくおれおれおれありてふく慈眼よみそあふ  
あふのふへくおれの路ハあふをぬ雲をふつひきくぬ雲に  
跡はるふもれ多くにわひ中堂よりみち路よハ弥陀乃はひ  
く星をそめてはあふの極樂あふもよへく是ふくあふ  
一味乃法雨より浮ひて心あふ草木あふも浄土の縁をひす

あふくあふにあらふ人の一句一詠をあふて花ハあふ  
くあふにらあふも色香のくみあふくあふはらんあふと  
句帖とりよの法よりて人くは筆をゆくはあふ此あふ  
む交をけくあふ書はあふく尋風乃許よあひあふぬ  
いさく目小見えぬあふひあふと吾もあふ花よりあふ心乃あふき  
あふにおひあふりのあふ是をあふすくは極樂もはあめて到ふ  
所ときけハあふをけあふあふくは千里の外乃すくは川の  
花の蔭よりあふてあふ流り筆をあふ

句帖序

春乃雪窓をあて梅いさくひくは履をけあ杖をひく

下も老懶せんさあくたり一炉ふぬと炭城おほく  
吹おうしてひら茶をとりもれ多くてひねもす茶をすふ  
あまらうれ何し乃老人くれの世捨人なりと膝をたたく  
て終り腹からくくおのく六盤の奥入り茶具なりとつ  
み川取おて是ハ唐屋の物かまハ誰くの物なるか  
おしりふりおにつもて茶中のひらきりやうを磨て茶を  
いふもれ名あまき人の書付ありあまみものもせれ小  
心うけまてなると茶のゆめときまをゆめとたたく  
なますもちかりとも茶乃湯に用らると見らひはしと  
るるにせはしとの目さくやいひあまると利休のまふり

其角々雑談も書おた侍しよれ人のよてあまひしといふもの  
或ハ花押をく加へく物をもていふふも故りくれ器あれや  
おのまう心にまうけまてみるゆめにはあまのまをまらう  
あまらまゆく屋れふや六塵の境界も物なりけくこれに真  
空の理をおもひあまらむ系哉佛のけとまも中法をま  
もれくしとまもいひあまに此まうまをまあまはまを  
佛のみらあまにくまておもひまうまをまの事なりあま  
みまうくまみわらふまうま秋田乃一棒々句帖といふ  
ものけくまにものまをまといふ人くくの句をま  
もはまをまま今の世ふ名たり能者乃ううへ



つと多田の森乃みとを居りく夏にあり申

ふゆもくはつらく松の朝霧の起

金翠吹石蒼波をよみわき人く来りてかのみり  
題をもちり句をよみたのほく物ほくめはうせりたりの  
あふかやいひおれふかよと併とよりの館乃らほきより  
味曾調へありつに心ひくあふいひてわらふ旧國々小豆  
乃らに秋のをこらちあふりたふらふ多那くきいひて  
海とくふその日乃類

松山乃らぬまにうたほくきき

ふちへに油うけりる地蔵

二日をそく起るを志居るはひ庭を記かてありし  
あふに物の幸をほくちりあてまねおれ浅草のかみ  
耳もやにひききあふゆめちらにおよひ城をよそ十は  
みそよ替といくもほく居りりおほえてうほく心いさ  
はとほくすひさく乃常のちちくやあき乃をりくまる  
おとよては起と目ハは免りああみ此五来と書音  
あふまよくゆりひききあふちにくと書てはら  
江戸小町をひらふりねとおゆく去はせぬと

五来をおりふ

はくねく乃袂りうまけつ裕



冬ひそめたるあけみちの秋の風や多らぢめけむ魯  
隠はる川に江戸よりそく人あきまみ川舟をももふ  
して志ほさぬは鷹のさわくをえそあきりに古園をおりふ  
心をひかへしすれとあや目のまの屋うちを

すみと河あしうをゆくは雨古鳥

三日 ぬふりてのちをくしちへ起すれとあをむつり  
きにそ那屋めぬと屋つり千住とよふ不ようをあや  
あつらぬを二本あつらぬ

ぬふの子やあつらぬを付て

四日と五月もあめ屋ちをあやしハるのそ屋紀内急に

あつらぬ中ちをさきて降はるきれむと人のよ

う紀屋や桶の中ちて五月雨

四山藁卷二終



